

(2) 介護等体験を終えて 〈3〉

コミュニケーションは心を通じあわせること

法学部 2年 K.N

今まで小学校時代の特別学級との関わりを除いては、障がいのある生徒と接したことはなかった。また、デイケアの実態を全くと言って良いほど知らない私にとっては、体験がとても不安であった。なかでも、唐突に現れた実習生に生徒や施設を利用される方は快く思わないのではないか、心を開いてくれないのではないかと不安があった。

しかし体験を終えた今振り返ると、実習生の私に生徒もデイケアの利用者の皆さんも積極的に声を掛けてくださり、心を開いてもらったのではないかと思える一面もあった。

2日間の特別支援学校では、高等部を担当した。電動車椅子を利用している生徒が多く見受けられたが、自身のことは大体自分の力でできる生徒が多かったように思えた。

初等部、中等部が併設されている学校だったのだが、高等部の女子と中等部の女子との関わりのなかで学ばされることがあった。高等部の彼女と仲良しな中等部の女の子は、高等部の彼女よりも障がいが重く1人で食べ物さえ食べられない状態であった。もちろん会話も難しい。そんな2人が自他ともに認めるほど、仲よしである理由が最初は全く分からなかった。しかしお姉さんである高等部の彼女が話し掛けると、女の子はとびっきり微笑んだり、彼女の問い掛けに嬉しそうに頷くのである。互いに言葉で話しができなくても、心が通じ合っている。心を通じようとすればコミュニケーションは成立するのだと彼女たちから学ばせてもらった出来事であった。

デイケアサービスでは、利用者の皆さんと談

話する時間が多くあった。自分から積極的にお話して下さる方もいれば、自分から全く話題を提供しない方、認知症で同じことを繰り返す方、その日の利用者によって施設の雰囲気ががらりと変化するくらい様々な利用者の方がいた。「何かお話をしよう!」と力んでしまっていた初日は、話題に困った。自分自身が緊張して硬くなっていたこともあり、人見知りをされる方には全く受け入れてもらえていないように感じた。しかし緊張が解け、自然とお話ができるようになる人見知りをされる利用者の方ともお話ができるようになった。それだけではなく、コミュニケーションがなかなか取れなかった利用者の方が私の指示を待っていてくれたり、冗談が言い合えるようにまよなっていた。最終日近くには自分自身が、利用者の皆さんとの会話を純粋に楽しめるようになっていたことに驚いた。コミュニケーションは自身の気持ちや言動が相手に伝わる。自身の変化を利用者の皆さんとの関わりのなかで実感したように思った。

この体験の総括として「偏見は体験してなくしていくことしかできない。」と特別支援学校の方がおっしゃっていた言葉を思い出した。自分にはいくら「偏見はない!」と思っていたとしても、実際の現場に入って体験させてもらうと全くもっていないわけではなく、むしろ偏見をもっていないと思い込んでいる自分に気付いた。体験を終えた今、街で肢体不自由の方や年配の方を見る目が優しくなったように思う。この目を、教員を目指すからではなく、障がいを抱えた人たちと同じ社会を生きる人間として忘れずにいたいと思った。